

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第12号

平成28年3月20日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



看護学部棟ホールにて

ごあいさつ

同窓会会長 梶原和歌

今年1月中旬から日本中がすっぽりと猛烈な寒気につつまれ、高知も西部や山間部は大雪となりました。しかし季節は正直に時を巡り春となって会報12号をお届けする時期となりました。看護学部同窓会の皆さまにはお元気で過ごしてでしょうか。

私たちの生活を取り巻く環境は相変わらず不安定で予測のつきにくい状況にあります。昨年の世相を表す漢字が「安」でしたが不安の安ではなく、安心・安全な社会を創ろうという前向きな気持ちで暮らしていきたいものです。ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智氏や物理学賞の梶田隆章氏のニュースは私たちを勇気づけてくれました。又ご高齢の天皇・皇后両陛下が先の太平洋戦争で熾烈な戦闘があったことをお詫びし、慰霊と平和友好の旅を果たして下さった真摯なお姿のニュースに感動したこともありました。母校では戦争終盤の1945年に開学した女子医学専門学校を起点に創基70周年記念事業が計画されているようです。そういう計画に特別な想いをもつようになった私の年齢になると、訃報に接する機会も多くなりました。大正末期・昭和・平成と激動の時代を生きぬいて来られた方々、特に愛情を注いでくれた父母の生涯を思うと感謝に堪えません。要職にあった同窓の友人で定年より早く退職されて高齢のご両親との賑やかな日常を優先された方がいます。生前父上は何度も娘が看護師であって本当に心強いと語っておられました。終末期「〇〇ちゃんあなたには世話になったなあ有難う！」という言葉を残して眠られたことを伺い、自分の体験とも重なって看護という専門職を選んで良かったと実感したことでした。

2025年からさらに10年を越すと多死社会もピークに達します。都道府県ごとに「地域医療構想」が形になるはずですが。全国に散らばった同窓生がそれぞれの土地でその人のキャリアや年齢に相応しい役立つことがあれば平和や健康の護り人として地域貢献できるシステムが創れないでしょうか。1億総活躍といわれる時代です。まずは自分の地域の実態や近況を情報交換し合うシステムの事始めとして事務局に近況をお知らせください。最後に看護学部同窓会創設前から大学を代表して庶務を担当された森下利子先生が退官されます。会の運営や会報編集その他もろもろご尽力くださいました。心より感謝し今後も引き続きご指導下さることを会長としてお願いいたします。



主な内容

- ①座談会「看護学部を振り返り、さらなる未来へ」
- ②訪問看護師育成の寄附講座開設
- ③地域とともに学ぶ 看護学部1年生
- ④学生のボランティア活動
- ⑤ようこそ先輩！
- ⑥インドネシアからの留学生 高知体験記
- ⑦全国各地で活躍する卒業生・修了生



看護学部を振り返り、さらなる未来へ

わが国で最初に看護の大学教育を開始した高知女子大学看護学科、その歴史と伝統を受け継ぎ、平成23年の校名変更を機に創設された高知県立大学看護学部同窓会も、今年で6年目を迎えることになりました。

本会報では、梶原和歌同窓会長、同副会長で高知県立大学副学長の野嶋佐由美先生、同副会長で看護学部長の中野綾美先生、大学院看護学研究科長の藤田佐和先生に、本同窓会の一員として懐かしい学生時代を振り返り、看護学部の社会で果たす役割、さらに同窓会のビジョンや今後の期待などについて語っていただきました。

司会 大学生活の中で印象に残っているエピソードについて聞かせてください。



梶原和歌 同窓会長
(10期生)

梶原 私のクラスは20名で、高知からは5～6名だったんですけど、岩手や東京、新潟から来た人もいて、みんな個性が強く授業サボる人もおるし、いろんな人がいておもしろいクラスで、アットホームな環境の中でスタートしたんです。

アメリカから帰って来られたばかりの菊井和子先生(3期生)が、論文を書くことに興味があられて、医師の書いた論文と看護者の書いた論文の違いや、文献検索の仕方について教えてくれました。

もう一つは看護者の疲労度っていうテーマで、夜勤実習をしながら、看護婦さんの尿を集めて、疲労度の因子分析するという、本当に研究のまねごとみたいなことを大学時代にさせてもらって。

私たちは、これから看護学の学問を打ち立てんといかんがやっというふうに、みんなが自由な発想で学ぼうと探求したことや、そのような仕掛けを先生方がしてくださって、前向きなエネルギーを出せる環境をつくってくださったというのが一番の思い出です。

野嶋 私たちの時は、入学生は、先生と一緒に泊まり込んで、地域の中での人たちに触れ合ったり、地域の問題を見つけて、みんなで話し合いをしていました。私は地域の祈禱師を訪問して、その経験を発表しました。今、アクティブラーニングだとか、地域に出ましょとかって言うけど、それなりに、昔からやっていったなと思います。そして、その1年生の4月くらいから、皆が集まって自分の将来のビジョンを語り、直感的に「私はこうなりたい」というのを語っていたというのが、思い出としてあります。



野嶋佐由美先生
(20期生)

中野 私のクラスは27人いて、ネットワークが強くて、今でもよく集まっています。学年担当が松本女里先生(8期生)で、一人ひとりの学生にまるごと関わってくださる先生でした。実習は、本当に自由でした。

自分たちが大事だと思うことを考えて、先生に「このようなことをしたい」と説明すると「どうしてそう思うの」と尋ねられ、もう一度考えて、説明して、「じゃ、やってみたら」みたいなことでやっていました。

すごく印象に残ってるのはカンファレンスで、先生も一緒に入ってるカンファレンスでは、延々と県立中央病院の教室で語り……。考えたこととか、みんなが意見を言うので、先生と一緒にカンファレンスは19時ぐらいまでやってたんだと思うんですね、その後、下宿に移動して。語り尽くしていた実習でした。

卒論は、京都から通って来られていた岩井先生の指導で、腰痛の実態調査を行いました。3部構成で、社会で生活している人や県外の健康診断でもデータ収集に参加させてもらい、1,000人を超えるぐらいのデータをとりました。

終わった時に、岩井先生が製本にしてくださって、「こういうのはこれから先、社会に出て行くときに名刺代わりに持っていくものだから」って冊子にしたものを持たせてくれたんです。その時は、意味も全然分からなかったんですけど、すごく大事なことを教えてくださったんだなと思っています。

藤田 私たちの学年は、個性的な学生の集まりでしたが、先生方が学生一人ひとりを大事にして関わってくださったおかげで、個々が学内外で好きなことをして卒業できた、そんな学年でした。今、自分が教員になって、先生方はすごかった、今の私にはできるかな、そんな度量はないな、と思うことがたくさんあります。

実習では、私たちが一所懸命、計画立案して、考えてきたことを、「いいんじゃないの、やってみなさい」と、学生が考えたことは「まずやってみたら」と実施を見守ってくれました。夜勤実習では、看護師さんと一晩一緒に過ごすことができ「あれ聞きたい」「これ聞きたい」という学生の質問に丁寧に答えて頂くなかで、気が付いたら看護師になりたくなっていました。

地域看護実習では、保健師さんが体験の場を多く準備してくださっていて、知らないうちに地域の人たちに接することができ、実習が終わるころには保健師さんになりたくなくなっていました。教育と臨地が近くて、学ぶ仕組みや仕掛けが自然とできていたと思います。

印象的なことは、勉強と遊びのメリハリもしっかりしていて、よく遊んだことだと思います。時効です。



藤田佐和先生
(28期生)

司会 看護学部の過去と現在について、どうでしょうか。

野嶋 看護学科から看護学部になり、幾つかのクライシスを乗り越えてきたんだけど、定員が80名になる時には、この今の私たちの教育方法とか、考え方を踏襲するのは難しいから、新しい教授方法を開発しようかと思っていました。しかし、結構、昔ながらのやり方が残っています。でも、教育の本質は、ラジカルに変わったっていう感じはあんまりなく、昔から培ってきたものを大事にしつつ、変革している感じですね。それゆえの課題もありますが、価値観や教授方法は変わっていないように思います。大事にしてきたことはみんなの輪、協働かなと思います。協力関係。時代の流れの中に変えていくものと、根っこところでオーソドックスなものがある。

看護学部は変わらないコア、校風のようなものは変えず、社会的な存在として、変革していくことが大切な。

司会 先生が言う継承していくことの根っこの部分とは何でしょうか。

梶原 私も外から大学を見るからかもしれないけれども、変わらなくてよかったっていうか、変わらないっていうことは保守的であって非改革的でないということではなくて、本当にとっても大事なコアになる部分をもうずっと堅持してくれて、そしてその質が保たれているっていう、揺るぎない、他のものは色々変わっているけれども、女子大の風土っていうか教育、研究、開拓者精神、そういうマインド、そういう核になるものをすごく量的にもたくさん要求される中で守ってくれてるなって思うのね。

核を維持するための努力っていうのはずっと保たれて、高知女子大看護学会誌を見ても、年々厚くなっていて。中身的にも分かるし、あの形は本当にあの時代につくられて、そして、ずっとこれが続いているっていうことはものすごい財産で、それはどこの学校もまねすることができない、歴史に刻まれたすごい業績だと思います。

それを少ない人数の先生方が支えて、運営して、開催し、冊子にしてっていう、それだけでも、それが形にあらわれているんやないかなって思うのね。普遍的に大学人、大学として必要なものが保たれているっていうことを感じます。そういう教育を受けた修士とか博士課程の修了生が、臨床現場でもリーダーシップをとってくれてるのね。

野嶋 梶原さんの話を聞いて、大学院の在り方を変えて拡充していくことが必要だろうなって思うかな・・・。

中野 臨床のほうから送っていただくというか、何らかの形で大学院にコンスタントに来ていただけるような仕組みができたらいいなと思います。

梶原 そういう人たちを育てる教育機関もないとおかしいものになると思うがね。教育を受けられるような、行けるようなコースになっていったら、現場が変わるでしょうね。

藤田 教育力をつけるようなコースをつくっていったら、臨床からも教育担当の師長さんとかが来ていただけて、つながりができていくかと思います。



司会 これからの看護学部同窓会のビジョンと期待について聞かせてください。

梶原 同窓生の中にも色々あって、全国に名を馳せるリーダーシップをとってる専門領域の諸先輩もいらっしゃるけれども、親の介護をして、最愛の身内の人に「看護科を出てもらってよかった」、「ありがとう」って言ってもらった同窓生もいて、すごくありがたいことと思うがね。

看護科を出た人っていうのは、生活とか、暮らしとか見えて、それからスキルを活用することや、みんなそれぞれが活躍できる場があると思います。

人は変わってもトータル24時間、誰かがキャッチして、誰かがきちんと看護計画立てて、それを発見して解決に向かうっていう、もう生活全部を、疾病も含めて見てるのがナースだと思うのね。

卒業生がネットワークをつくって、年を取っても何か卒業生として活躍できる、お手伝いできることはないかしらって、みんなOBが言ってるわけだから。

梶原 卒業生がもっと地域に根ざして、それぞれ活躍していったら、県立大の卒業生はすごいって。そして年齢にふさわしい仕事をしてくれるんだって。また、若い人たちが卒論のテーマについて聞きに来たときは教えてあげたらいいし、紹介してあげたらいいし、もっと紹介も簡単にできるし、連携がうまくできていくと思うのね。

どういところで、どういうケアを受けたら生きていけるかっていうことについて、手探りの状態の住民がたくさんいる中で、やっぱり卒業生が1軒1軒、ケースを見つけては、その制度はこうなってるから、じゃ、このケアマネさんに相談しましょうとかっていうアドバイスをちょっとしてあげれるような、そういう見える形にしていけるといいなと思います。

やっぱりここに昔の高知女子大の看護科、県立大学で南先生が学長している大学があるから、高知県は健康日本一になれたんだってという結果が出せれるような、網の目のネットワークをつくったらいいなって思うのが、私の考えていることです。

野嶋 今、まち・ひと・しごとっていう、それぞれの地域でビジネスを創っていきましょう。看護の同窓生たちが集まってNPOなどを立ち上げて、梶原さんがおっしゃっているようなことができるように、本当にできればすごいなと思うのね。その時には、マネジメントできる人、集まる場所だとか、一定のメンバーとかが必要ですよ。高知県には、それに対する社会のニーズは高い。できればすばらしいなと思っています。

藤田 県立大卒とか女子大卒とわかったら、お互いこれまで知らなくてもすぐにつながっていくという文化があるので、実現するとかすごい力になるのかなと思います。

中野 県立大、女子大の同窓生は、東から西からたくさん、看護師、保健師、助産師、養護教諭を経験された方がいらっしやるので、そのような仕組みができると、いろんな活動ができますね。そこにまた、学生も一緒に活動の一部っていうか、ある1日かもしれないけど参加させてもらったりすると、そこでの学びもあると思います。先輩と後輩とのつながりもできるかなと思って、すばらしいなと思いました。

藤田 卒業生の方が大学に入ってきてくださって、学部の学生さんの教育に力をかけてくださる、例えば技術演習の患者さん役だったり、体験談の語りだったり。看護学部の学生は、先輩から得られるものが多くあるのではないかと思います。学生さんも出て行くし、卒業生も大学の活動や教育の中に入ってきていただけたらいいなと前から思っていましたので、実現ができると素晴らしいと思います。また、看護学研究所としては、大学院の修了生が大学に戻ってきたり、同窓会を通じて大学院のネットワークが広がり、強固になると新たな未来が拓けていくと思いました。

野嶋 梶原会長さんのアイデア、志向してるものは、いつも刺激的。「みんなで、その方向性でいけばいいな、実現できればいいなって、みんなが思うってことは、やっぱり同窓生のあつまりですね。共通項があって、共通のコアを持っているから、いろいろな時に、同じ方向が向かっていけるんだなっていうのを感じました。

中野 看護学部にとって、同窓会は大切なところ、向かうべき、方向性を確認したりできるところです。つながりを確認し、時々帰ってほっとできるところでもある。本当に感謝です。



1968年新校舎完成



1998年 池キャンパス
に看護学部が移転



1980年 南舎完成

高知県中山間地域等訪問看護師 育成の寄附講座開設

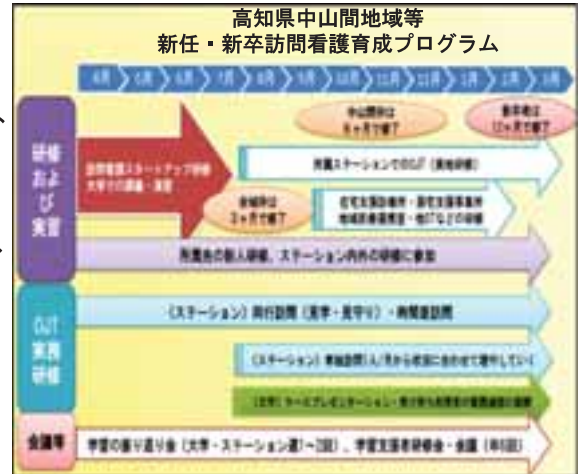
高知県中山間地域等
訪問看護師育成講座



高知県立大学は、高知県看護協会等と連携し、平成26年11月に「地域における医療及び介護の総合的な確保の推進に関する法律」による地域医療介護総合確保基金事業(消費税の財源活用)に、高知県の課題である訪問看護師育成、雇用等に関する事業提案を行いました。その提案をもとに、平成27年5月に、高知県からの寄附金を受け、本寄附講座が開設されました。

寄附講座は、高知県の中山間地域等訪問看護師の人材確保・育成・定着の困難を抱える小規模訪問看護ステーションの課題に対して、大学の教育力・学習環境を活用し、効果的な学習支援プログラム開発を行い、訪問看護ステーション、看護協会、医師会、社会福祉協議会、高知医療センター、高知県と協働し、新任・新卒訪問看護師育成に取り組むものです。今年度は、11名(中山間枠6名、全域枠5名)の研修生を受け入れ、大学での訪問看護スタートアップ研修144時間と訪問看護ステーションでのOJT(実地研修)を行っています。

国内での新任・新卒の訪問看護師育成に、大学が研修やOJTを通して学習支援を行う事業は全国でも初めてのものです。



訪問看護師(第1期生)
四万十町 木村さなみさん



本講座の特徴は、高知県立大学の看護学部、健康栄養学部、社会福祉学部の教員が協働して講義・演習を担当しています。少人数で、受講者の経験や学習に応じた個別プログラムで、講義演習はシミュレーター等を用いて対象者別、状況別に学んでいき、OJT(実地研修)を通して看護展開を行っていきます。

中山間地域は広い地域、少ない資源、高齢化などから、重度の方の在宅療養や看取りが難しいと言われていますが、研修修了後には、中山間地域で単独訪問ができる実践力、在宅ケアで多職種と連携協働する力を身につけ、地域で働く質の高い訪問看護師の育成を目指しています。



平成27年度開講式
平成27年9月24日



演習・グループワークも
意見を出し合って..



シミュレーション研修は実際の訪問場面を設定して、真剣です



OJT(実地研修)では
週1回、学習支援者と
振りかえり会を行います

平成28年度からは看護養成機関を卒業した新卒者の訪問看護師育成を開始します。
在宅の看護や地域で働くことに興味がある方は是非、一緒に学びませんか？
詳しくは、HPをご覧ください。



第1期生全域枠修了式
平成27年12月22日

高知県立大学健康長寿センター 高知県中山間地域等訪問看護師育成講座
担当：森下安子(26期生) 森下幸子(M6期生) 野村陽子 088-847-8764
HP：<http://www.u-kochi.ac.jp/site/homecare/>

地域とともに学ぶ 看護学部1年生

高知県立大学は、「域学共生」—大学が地域を変える。地域が大学を変える。—という理念を掲げており、地域と大学が互いに手を携え、教え合い、学び合い、育ち合いながら、高知県の地域の再生と活性化を実現したいという想いを込めた言葉が「域学共生」であり、地「域」と大「学」が「共」に「生」きていくという考え方です。



「伝統野菜である田村蕪による地域活性化の取り組みを学ぶ」グループ



菜の「田村蕪」による地域活性化を図っている生産者への聞き取りや農作業の体験などから地域の魅力、未来の田村蕪に向けての提案をするグループなどがありました。

田村蕪に関する実習グループの学生たちは、「中山間地域に暮らす人々は“過疎・高齢化の進行による集落機能の低下”“農地や山林の保安全管理機能の低下”など多くの課題を抱えながら生活をしている」ことを学び、そして、「この町が好きだからずっとここに住んでいるという人々の、その思いを支えることができるようなケアがもっと普及するべきであるという思いから在宅看護への関心が高まるきっかけにもなった」、また、「豊かに生きるために人と人とのつながりが重要であるかを強く感じる事ができた」「様々な課題を抱える中山間地域、そこで暮らす人々、そしてその地域を活性化しようとする取り組み、すべてに対して私たち世代だからこそ提案できることがたくさんあり、知識を身に付けていきたい」など、この実習によっていろいろな学びがありました。他のグループの学生も「新鮮で楽しい実習になり、地域の課題や良いところを見つかる事ができた」「今後も積極的に地域の活動に参加し、地域で活動している方々の意思や行動力を受け継ぎたい」などと多くのことを学んでいました。

学生たちは、この地域学実習Ⅰの成果を、実習中、地域の人々へのプレゼンテーションや意見交換を実施し、実習終了後、広報誌にまとめ、さらには平成28年3月19日に開催される報告会のポスター制作に取り組みました。

これらの学びを活かして、2年生での地域学実習Ⅱ(必修)では、学生自ら、創造的な企画や運営と力を発揮し、看護者としての力を育てていこう。

これまでも高知県立大学は、「県民大学」として地域のみならずと協働しながら、地域振興に取り組んできました。また、平成25年からは地域の課題解決に主体的に取り組む学生を大学として支援する「立志社中」がスタートし、看護学部の学生たちの多くが「イケあい地域災害学生ボランティアセンター」、「健援隊」、「いけいけサロン活動」などのチームに参画し、それぞれの持つ若さあふれる力を発揮しています。チームによっては、看護学部以外の学生さんと協働し、それぞれ学部の特性を活かしています。

これらの活動を続ける中、全学の学生が地域に入って社会の人々とともに学びあい、地域とともに歩む大学をめざすとして、平成27年度から新しく「域学共生」に関するカリキュラムが共通教育科目で必修科目に位置づけられ、今年度は、看護学部・文化学部・社会福祉学部・健康栄養学部の4学部の全1回生を対象に「地域学概論」と「地域学実習Ⅰ」がスタートしました。

「地域学概論」の授業概要は、公共的な問題を「地域」という枠組みで捉え、学際的に探究する意義や、高知県の地域課題、地域活性化の取り組み事例などを学ぶ。その学習を基礎に、「地域学実習Ⅰ」では、実際に地域での体験活動、調査・記録活動などを行うことを通じて、地域にある固有の価値を発見し、地域が実際に直面している諸問題の現状と問題の諸要因を理解するとともに、地域課題に取り組むことが市民として生きていく上でどのような意味と意義を持つのかを考察できることでした。

「地域学実習Ⅰ」は、地域の課題が24課題あり、実習地域の特性や課題に関する事前学習、フィードバック、まとめまでを3~4学部の学生たち(14~15名/グループ)と共同で取り組みました。例えば、住民と地域を廻り、減災・防災に生かすハザードマップ作成するグループ、道の駅や直販所の設置を検討している地域に地域文化の発信拠点としての工夫などを情報提供するグループ、伝統野



「減災・防災・震災復興に向けた‘未災地ツアー’」ハザードマップづくりグループ

(指導担当:松本鈴子 記)

学生のボランティア活動

いけいけサロン活動

「結成1年目！まずは、地域の方と顔の見える関係づくりをめざす！」

いけいけサロン活動は、平成27年5月に、看護学部1回生と2回生で結成された新しいプロジェクトです。

高知県立大学池キャンパスがある池地域の住民の方との交流を図り、普段の生活でも助け合える関係になりたいと、毎月1回サロン活動に取り組んでいます。サロン活動の場は、池公民館と高知県立大学です。

サロン活動の内容は、住民の方と学生が話し合いをして決めます。住民の方も、学生も、みんなが楽しめるもの、負担のないもの、それぞれの特技を活かしたもの等、毎月趣向を凝らして企画しています。

本年度は9回のサロン活動を行う予定です。1月には、『お雑煮会』を通して、高知のお雑煮づくりを行い、住民の方が長年慣れ親しんだお雑煮の味を教えてくださいました。地元の料理づくりを通して、もっと高知のことが知りたい！と次の活動につながるヒントを得ることができたようです。

活動当初は、緊張してぎこちなかったやりとりでしたが、今では名前を呼び合い、自然に会話ができるようになりました。住民の方も、学生に、取り組みたい事や、逆に自分たちの負担になること、時には社会人としてのマナーや生活の知恵を教えてください下さる等、少しずつ距離が近づいてきている様子が見られます。

2回生が代表、1回生が会計を務める他、それぞれの学生が役割を担いチームを運営しています。このような経験も初めてで、うまくいかないこともあります。少人数の強みを活かして頑張っています。

来年度は、住民の方からいただいたヒントをもとに、池地域を拠点に新たな活動にも取り組む(予定)です！



健援隊プロジェクト

「健康になることを応援する」ことから健援隊と名付けられた組織は、立志社中がはじまった平成25年から活動をスタートしました。

当初は、6名の軟式野球部を母体にして、対外試合の際に相手チームや観客などを対象に、AEDや心肺蘇生法の知識普及を行いたいという当時のメンバーの意向により活動がはじまりました。その後、フットサルや他の催事にも活動の幅が広がり、女子学生を含めて総勢約40名の組織に成長しています。平成27年度には、公益信託高知新聞・高知放送「生命(いのち)の基金」に採択され、AEDのシミュレーターなどを購入しています。

活動内容に関しても、AEDや心肺蘇生法の知識普及は、健康文化を増進する活動としてより広範囲なものとなり、脳卒中の早期発見、小児救急電話相談事業の#8000、過疎地医療などへ活動の内容も広がってきました。また、「伝え方」にも工夫し、漫才や寸劇を交えた活動を行っています。

この取り組みと並行して初年度から行ってきた熱中症の予防啓発を印刷したうちわをよさこい祭期間中に配布する活動は、年々規模が大きくなり、本年度は4100枚になりました。さらに、うちわの作成費も外部からの協賛によって約40%を制作できるようになりました。

伝統ある本学ですが、時として前例に倣うことのみをよとすることが学生さんにもあります。自由に発想し、失敗を繰り返す中でそれを具現化する能力がこの活動を通じて培われているように感じています。これからもご支援頂ければ幸いです。



ようこそ先輩!

岡田 溪子さん(7期生)

1961年高知、鳥根県の各小学校、中村市の病院を経て1970年3月高知学園短期大学・保健科新設に伴い和井兼尾教授(故)の推薦を頂き着任。協力を強く頂いた福田俊治学長(前女子大教授)は、着任1週間後に急逝され保健科常勤教員は31歳の私一人に。1ヶ月後1期生96名を迎えて35年間の時は流れ学短を退職。2005年JICAシニアボランティア(保健師)として南米パラグアイ国に(夫は扶養家族とし同伴)赴任。二次合格者はスペイン語・ポルトガル語班に分かれ横浜研修センターで1ヶ月間語学合宿研修し最終合格者23名が決定しグリーンの公用パスポートを手に各派遣国に分散して行った。空路34時間アスンシオン空港に到着し任期2年間の活動が始まる。異文化や生活習慣に馴染み、日系移住者にも受け入れられなければ活動は進まない。パ国9ブロック(以下区)で信頼と人間関係を築き現状を観察・分析し問題点を探った。各区に保健指導、看護、介護の知識を多少習得した者が居なければ、私の活動は帰国後何も残らないと実感。片言のスペイン語では活動に限度があり、Alfredo Grycink氏を家庭教師に2年間自宅(マンション・22F)で会話を必死で学びながら関係者との折衝を重ねた。



医師の協力も得、赴任約6ヶ月後人材育成講座を開く準備を調えた。保健師活動の傍ら自主性ある協力者13名を得て諸条件の調ったラパス区(アスンシオンからバスで約6時間)で不定期ながら延べ40時間余の学習を積んだ。修了者13名に医師は認定証を発行して下さり仮称・家庭看護師として新しい職業を立ち上げた。家庭看護師には「活動に見合った賃金を支払う事」を関係者と硬く約束し巢立ちの日、彼女らは認定証(医師及び私のサイン)を手に自分の力で賃金を得る喜びと熱意で感激の涙、私も安堵の涙が流れた。彼女らの「自分で得るお金」と言う言葉が新鮮で心打つ。

日本から持参した血圧計、塩分濃度計、糖度計と一緒に作った各種教材を活用し彼女達と行動を共にして自立を願い任期満了まで歩んだ。2015年活動は継続され指導者も増加し(全区42名)主に各区の訪問介護やデイ・ケア活動(各区にケア施設も共に開設)、年1回アスンシオンに関係者は集まり報告会を開き研修しているとの報を頂いた。学短在职時の苦難の数だけ脳に各種多様の引き出しが出来、発展途上国に一粒の種を蒔く事が出来たと思う。苦難がJICA応募へと導き 望郷の念を南十字星の輝きに私は救われた。

藤田 啓子さん(11期生)

“看護の本質は 女子大で学んだ”



高知女子大学家政学部衛生看護学科(以下、女子大)卒業後、3年の臨床経験を経て60歳で早期退職するまでの35年間短大で看護教育に携わってきました。

現在は保健師・整膚師として健康相談とアクティビティレクターとして遊びリテーション、紙芝居・絵本の読み聞かせなどのボランティア活動と筋肉トレーニング、趣味で過ごしています。特に健康相談では、これまでに培ってきたものが自然に統合され、相談者が納得いく助言をしてくれるからといって医師でなく私の助言を求めて相談に来てくれます。

卒業当初、私は「女子大の教育」を否定していました。そのような私を発想の転換させたのはクラスメートの存在と湯楨ます先生との出会いです。

卒業後お互いに支えあい近況を知らせるノートを回し始めました。ノートは多くのクラスメートを支えながら現在4冊目になりました。これも私たちのクラスの団結力は抜群だったからできたことだと思います。

研修先の短大で当時、「湯楨天皇」と恐れられていた湯楨ます先生にお会いしました。そういう先生だからこそお話を伺いたいと思い研究室を訪ねました。すると「私はこの短大に来て10年になるけど自分から飛び込んできたのはあなたが初めて。どこの卒業生？」と聞かれました。「女子大です」と答えると「和井さんが看護、看護といって看護の枠にはめ込まなかったのがよかった」「医学部でなく家政学部に創ったことがよかった」と言われ、私の悩みについてご自分の体験をいろいろ話してくださいました。そして「うちにいらっしやい」と言われ、辻堂のお宅で夜を徹して話し合っているうちに「女子大でよかった。私は私のままでいいのだ」という自己肯定感が湧いてきました。私が看護を学んだ時代は今のように看護学が確立しておらず、自分たちで考え行動しなければならなかったことが逆に自由に発想し、ものおじしない卒業生が育ったのだと思います。私が「看護の本質は女子大で学んだ」と思う所以です。

私はこれからも「大きすぎず 小さすぎず 自分サイズ」で生きていきたいと思っています。

インドネシアからの留学生 高知体験記

(DNGL University of Kochi: Hastoro Dwinantoaji)



The Difference between the Indonesian Culture and Japanese Culture

Although Indonesia and Japan are in the Asian continent, but for culinary affairs of Japan and Indonesia have fundamental differences. The most fundamental difference is the use of herbs in each dish between the two countries. Indonesia has a stronger food ranging from flavor and aroma. Strong senses that arise from the use of many spices, while Japan only rely on natural flavors.

Because it uses a lot of spices so that make processed food to be spicy. This is thought when consumed spices dominate rather than the main ingredient. While in Japan limitations spices make dishes there have natural taste. If in Japan, eating seek a sense of the original, in Japan the very limited to the issue of spices, different from Indonesia who has everything. Although there are

differences, there are also similarities owned by Indonesia and Japan. As Indonesia and Japan are both island nation, then the two countries of these have seafood so the material from the sea also can be used for food consumption by the people of each country

Global Forum on Research and Innovation for Health (Forum 2015) at the Philippine International Convention Center

For four days from August 24–27, 2015 in Manila, Philippine, the Global Forum 2015 on Health themed “People at the Center of Health Research and Innovation” brought together from around the world’s leading stakeholders from the government, business, non-profit, international organizations, academic and research institutions, and social entrepreneurs to tackle the biggest global health issues and create effective partnerships for action on research and innovation for health. Delegates and speakers from various countries in the world have participated in the conference sessions of the focused sub-themes on Increasing the Effectiveness of Research and Innovation for Health through Social Accountability, Increasing Investments and Country Driven Capacity Building, and issue focused sub-themes on the Role of Research and Innovation in Health in improving Food and Nutrition Safety and Security, Health in Mega Cities and Disaster Risk Reduction.

Multiple public forums and various conferences were held on the theme of disaster risk reduction and reconstruction organized by various professions and organizations. This forum was geared to help us acquire new understandings of current and future challenges in the global health as we together find appropriate solutions sourced from all corners of the world. The DNGL students from University of Kochi (Japan) together with a group of graduate students from the Ateneo de Manila University (Philippine) had an opportunity to perform their presentations of the past researches and training overseas in the workshop entitled “Training of Disaster Situation Report from Voices of Survivors”. It was the first presentation at an international forum for the most of graduate students. At the podium, the students delivered to talk in English and this experience was very valuable for them. This gave us an opportunity to think about how to utilize and demonstrate our expertise in the health care sector. We hope to conduct further research as a part of this program so as to enable further communication through industry-government-academia collaboration, interdisciplinary and international cooperation in the field of disaster nursing.

During a workshop “eBayanihan x SHEREPO” at the Health Global Forum from August 24th to 27th 2015 in Philippine, the researcher team extensively used tweets to gain important information for disaster studies that conducted following a 7.8 magnitude earthquake that pummelled Nepal in April 2015. These were used to acquire information on the needs of people in affected areas, the locations of these affected areas, reports on infrastructure damage, requests for rescue or relief, and prediction of crowd movement. Information was particularly useful for locating areas where help was needed, and in predicting crowd movement. Based on the overall

information gained, the team found it necessary to train on the proper use of social media or create a system that would allow direct reporting of needs to facilitate decision making. It was also found that there is a need for language translation due to the observation that the Nepal earthquake and any other disaster of such magnitude attracted worldwide attention. Furthermore, the team conducted the simulation workshop with the scenario case to the participants. We think the using informatics technologies will improve patient care, enhance provider safety and provide better command and control in a disaster situation. Information from network can be viewed on timeline of users, similar to the display on social media websites.



全国各地で活躍する

宮崎 恵美さん(26期生)

東洋英和女学院中学部 養護教諭



私は、卒業後すぐに養護教諭として働きはじめました。大学では、看護師や保健師になるための勉強には多くの時間をかけて学ばせていただきました。しかし、当時の母校では「学校保健」に関して、決して十分な教育を受けることはできませんでした。その頃の母校は、卒業後はまず医療現場や地域での経験を重ねることが必要であると考えており、養護教諭としての人材を育成することの必要性を感じてなかったのだ、と卒業生として思っています。

最初の職場であった高知学芸中学・高等学校では、養護教諭としての私自身が力不足であったため、十分に仕事ができませんでした。高知学芸では「養護教諭のしごと」といえば定期健康診断や生徒への応急処置が主でありました。

昭和58年度から縁あって、東京の東洋英和女学院中学部・高等部に勤めることになりましたが、ここでの学校保健活動は全く違っており、レベルの高いサービスをしていました。その格差は非常に大きいものでした。「養護教諭のしごと」を東洋英和の先輩養護教諭からはじめて教わった、といっても過言ではありません。養護教諭が発育曲線を手書きで作成し、肥満とやせの判断をして、早期に本人及び保護者へ保健指導をしていました。また、すでに相談室が学校の中にあり、スクールカウンセラーが週3回来ていました。スクールカウンセラーは保護者や教師の相談だけでなく、友人のいない生徒と一緒に帰宅をしていました。養護教諭は、摂食障害(拒食症)の生徒と保健室で一緒にお弁当を食べていました。このように心の健康にも手厚い対応をしていたのです。また、不登校生徒の保護者面接はもちろんのこと、担任との連携だけでなく、医療機関との連携もしていました。さらに、健康手帳を生徒全員に配布しており、健康情報を提供するという啓蒙活動をしていました。

学校保健サービスの大きな違いに大変驚いたことを忘れられません。もちろん、その当時東京都内においても学校保健サービスには格差がありました。このような学校間の格差はどこから生じるのでしょうか？ まずは、学校長の学校保健に対する知識・理解が必要だと思いますが、やはり養護教諭の専門性の高低が格差の要因だと思います。自分の学校の児童・生徒の健康問題を把握し、集団にどのようなサービスや支援が必要であるのか、個別にはどのような対応をすればいいのか、生徒の健康問題を正しくアセスメントをして適切なプランを立て、良質なサービスや粘り強い支援をする能力が求められます。卒業後の教育で身に着くことも多くありますが、やはり大学教育において、専門性の高い養護教諭を育てていただきたい、と母校には大いに期待しております。

豊田 邦江さん(30期生・修士1期生)

社会医療法人仁生会細木病院がん看護専門看護師



“大学院修士課程1期生のCNSとして思うこと”

私は、平成10年に高知女子大学に新設された大学院看護学研究科がん看護学領域の1期生として入学しました。14年ぶり訪れた永国寺キャンパスの入学式では、学部生の父兄と間違われ、30代後半で学生になる大変さと、自分のために学ぶ贅沢さを実感したことを覚えています。

平成13年には、母校修了生としては初めてがん看護専門看護師(OCNS)の認定を受けました。今年は3回目の認定更新審査年です。専門看護師とは、「複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するための、特定の専門看護分野の知識・技術を深めた看護師(日本看護協会)」とされています。役割として「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」の6つがあり、各CNSは所属する組織や立場に合わせて活動しています。

私が就職した細木病院は、一般病棟の他に療養病棟や地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟など様々な病棟があり、在宅部門もあります。現在、私は看護管理業務の一部を担いながら、OCNSとして院内の様々な場所で活動しています。外来ではがん診断の説明場面に同席し、治療方法や治療場所の選択に対する情報提供や、患者さんや家族の精神的な支援を行うこともあります。特に緩和ケア外来では、初回診察に同席し、在宅でのケアに対する相談や緩和ケア病棟の説明などを行っています。在宅やグループホームに入居しているがん患者さんに対し、訪問看護師との同行訪問を行うこともあります。がんの症状アセスメントや介護方法の検討などを行っています。いずれの場所でも、本人の意思決定を大事にすることや、家族コミュニケーションを促すことなど、大学院で学んだ理論を実践に活用していくことを意識しています。

がん患者さんを取り巻く状況は年々変化しています。在宅ケアのニーズはますます高まり、認知症を持つ高齢患者さんや、家族支援を望めない患者さんなど、複雑な問題を抱える方が増加しています。患者さんの状況を広く深く捉え、切れ目のない看護を提供していくOCNSへの期待は増加していると思います。同時に医療費削減が叫ばれる中、OCNSが関わる成果を見せていくことも求められています。

高知県立大学大学院修了のOCNSは35名になりました(2016年1月時点)。母校の先生方の支援を頂きながら“アストラルの会”という自主勉強会を定期開催し、先輩後輩と一緒にがん看護の学びを継続しています。様々な課題を抱えながらも頑張っている後輩OCNSが皆様の近くにいましたら、励ましの声を掛けて下さると幸いです。

卒業生・修了生

北浦 暁子さん(35期生) NKN(Nursing Knowledge Network)代表 西武文理大学看護学部客員教授

全国各地の看護協会や病院等で、主に看護部門のマネジメントや人材育成に関わる講演や執筆、コンサルティングをフリーで行っているのが、今の私の仕事です。現在、講演・講義は全国で年間150回ほど、教育・研究機関に所属しての活動ではないので、よく言えば「自由」、別の言い方をすれば「不安定」な毎日です。看護領域でも、研究職から実践、組織に所属しての活動から独立起業など、今までになかったキャリアを選択する人も増えています。新しいことへのチャレンジや、先例のない活動には、不安が先だって一步を踏み出せないことが少なくありません。強固なモチベーションがあったわけでもない私が、看護現場の人材育成やマネジメントに関する講演や執筆を仕事として、まがりなりにも活動できているのは、高知県立大学看護学部の先生方、諸先輩方、同級生たちの存在があってこそだと、今改めてしみじみと感じています。



バブルと言われた時代の最後に卒業した私は、「どうせ数年後には高知に帰るのだから、それまでは東京のど真ん中でお洒落な生活をするぞ！」と、今になって思えばあきかえるほどの志の低さで看護師として働きはじめました。そんな私が 学部卒業時に私が選んだ就職先は、先輩不在のいわばアウェイの施設だったのですが、「他流試合も大切ね。頑張ってください」と、申し訳ないほど心配していただいた後に、そう応援していただいたことを鮮明に覚えています。在学中に、いつも先生方から繰り返し聞かれて、当時はうっとうしくてたまらなかった「どうしてそう思うの？」「あなたの考えは？」「要点は何？」という問いかけは、気が付けば常に自問自答する習性となっていました。また、人生のいくつかの場面で選択に悩んだときにも、様々なアドバイスとともに、「あなたが考えて選択すればいい」と常にポジティブなメッセージを頂き、答えは誰かからもらうものではなく自分でつくるものという基本を自然と身に付けていました。

修士課程を修了して数年後に臨床を離れただぶらぶらしていた時期には、かつての恩師や先輩方、同級生のネットワークを通じて、「ちょっと手伝って欲しいのだけど」「力を貸してくれないかしら」と声をかけていただき、現在の仕事につながるチャンスと多くのサポートを頂きました。同窓というだけでそんなにも？と他大学の卒業生からは驚かれるような繋がりは、高知県立大学看護学部の素晴らしい伝統であり、先を進んでくれた皆様がバトンを繋ぎ続けて下さった賜物です。

自分が学部の時に享受した教育環境や、先輩後輩の連携がどれだけ特別で望んでも得難いものであるかは、人材育成やマネジメントという視点で数多くの施設の在り方や指導者の関わりを考える立場になった現在、本当に強く実感するようになりました。今更ながら気付いたことはこの機会に言葉にして感謝しておきたいと思い、拙い文章に記した次第です。頂いたたくさんバトンは後輩たちにきっちりつなげていきますので、今後とも皆さまどうかよろしく願いいたします。

鎌田 晃子さん(修士12期生) 熊本市立熊本市市民病院小児看護専門看護師

“小児看護専門看護師として”

高知県立大学大学院看護学研究科12期生です。“今までやってきた看護をもう一度見つめ直したい”その一心で私は、大学院生活をスタートさせました。大学院では、看護の知識と技術を検証し、看護理論に触れ、根拠に基づいたケアの方法論を通して、これまでの臨床経験を振り返ってきました。自己と対峙する中で、何度も頭をがつんと殴られた思いも経験し、苦しむこともありましたが、しかし、自分の思考の拠り所を手に入れ、「いかに考えるべきか」を習得し、陳腐化しない思考力が養われました。また、多くの先生方・先輩方との出会いは、一生忘れられないインパクトのある感動であったことを今でも覚えています。



大学院修了後は、勤務先であった熊本市立熊本市市民病院に復職しました。現在は、地域医療連携室に所属し、熊本県の事業であるNICU入院児支援コーディネーターを兼務しています。主な活動は、病状管理が困難なお子さんとそのご家族、院内外問わず様々な職種より相談を受け、小児在宅療養支援に携わっています。複雑な問題を有するお子さんとそのご家族が、地域でより豊かに生活していくには、リスク管理も含め、在宅移行の実現にむけた質のよいチームの構築が不可欠です。復職当初は、専門看護師として求められる役割期待の間で模索し、病院のドアを一步でと「ほっ」と一息ついて自分に戻ったような気がしていました。更新を迎える年となり、状態悪化予防のための生活支援や身体・精神・社会的・成長発達の側面から包括的にアセスメントを行い、必要とされる治療とケアが一貫して提供できるよう戦略的な視点にたつて事例を分析し、応用可能な看護の示唆を追求する姿勢は変わりません。また、地域活動の一つとして、急性期病院と在宅支援者側との連携が推進されるよう、地域内の社会資源のアセスメントを行い、ケース検討会を企画しています。このような力が培われてきたのも先生方とメンバーとの討議を通して、「どれだけ思考力を養っても自分一人で考えることには限界がある」ことを大学院で教えられたことにあると思います。価値観の違う専門職個々の主張の本質を捉え、対話を繰り返す中でさらなる自分の思考の進化へとつながっていくのを実感しています。

高知県立大学で学んできたことに感謝しつつ、更なるご発展をお祈りいたします。

ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。(平成28年2月29日現在)

矢野 みどり(19期生)

高知女子大学看護学部附属施設を考える会

平成27年度 高知県立大学大学院 看護学研究科
博士前期課程の院生の修士論文発表会

平成27年度 高知県立大学看護学部
学生の看護研究発表会



平成28年3月1・2日は、看護学部
4回生の看護研究発表会が開催
されました。



平成28年3月6日、看護学研究科博士前期課程
の院生の修士論文発表会が開催されました。
15名の院生は、それぞれの専門領域における
自らの研究の間をもって修士論文の作成に取り
組み、その成果を発表されました。

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いいたします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

本会報では、「看護学部を振り返り、さらなる未来へ」をテーマに開催された座談会をはじめ、大学の様々な、新たな取り組みを紹介しました。
座談会で語っていただいた4人の同窓生の語りから、大学時代は異なるものの、女子大から県立大学へと移り変わっても、受け継がれてきた自由で、一人ひとりの個性を大切に、自主性を育む校風は変わらず、大学の基盤になっっていることを再確認することができました。
そして、多くの先輩方がそれぞれの場でユニークな活動や活躍をされている様子に、本同窓会の豊かさを感じます。年代を超えた同窓生のネットワークの広がりを期待するとともに皆様からの発信をお願いいたします。

(森下・池添)

編集後記

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1高知県立大学看護学部
Fax: 088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>